

認知と記号研究会総括

2026年3月11日

小林 一路 露木 繁

認知と記号研究会では、2023年度から3年間、フーコーの『言葉と物』第一部を研究しました。これは従来から継続している研究テーマ「認知や認識における記号の役割」の一環として行われました。この研究は、学習方法、教育方法の研究と深く結びついています。30年以上の長い研究のなかで、フーコーのエピステーメーの研究に至った理由をはじめに説明しておきたいと思います。

以前の研究

1990年代に研究会は始まった。焦点は物を理解するときに用いる言葉(記号)である。ひとは言葉を用いるのだが、まったく自由に言葉を用いることはできず、**言葉はいかに思考を枠づけ決定しているか**という研究の必要性を感じたところから始まった。

言葉は記号であるというところから、「記号論」についての本を読み始めた。また、平行して認知心理学の本も読んだ。認知と記号の接点探るためである。「記号論」は比較的あたらしい学問であることと、ほとんどが日本人のソシュールやエーコの翻訳書による研究書であることから、誤訳や誤訳にもとづいた議論などに苦勞させられた。

記号論について

池上嘉彦の『記号論への招待』(岩波新書)から研究をスタートした。分かりやすく書かれており名著とされているものの解説にいろいろ疑問があった。つぎに丸山圭三郎の『ソシュールを読む』(岩波書店)を読み、ソシュールの講義録とされている『一般言語学講義』のソシュール理解の間違いを教えられた。続いてエーコの『記号論』からソシュールとは異なった記号論を学んだ。

ソシュールの記号論における日本人の誤った理解

1. シニフィアン(能記、記号表現)とシニフィエ(所記、記号内容)の誤解。

『バカの壁』(養老孟司著)では、「りんご」という単語を例にとりながら、ソシュールの記号論を説明している。記号(言葉)とは、言葉が意味しているもの(シニフィアン)が頭の中の「りんご」、「言葉によって意味されるもの」(シニフィエ)が本当に机の上にある「りんご」を指し示すという理解で、これを二つの側面と言っている。しかし、これは誤りで、シニフィアンは、音声のイメージであって、実際に発音されなくてもよい。指し示されるものも実在のものではなく、「りんご」という頭の中の概念(イメージ)というのがソシュールの考えであり、これらシニフィアン、シニフィエは2つに分離されたものではなく、二つの側面として一つの記号として捉えられなければならない。

2. 記号の恣意性とは、シニフィアン(音声イメージなど)とシニフィエの結びつきに何かしらの根拠があるわけではなく、恣意的な約束から成り立っていることであるが、その証拠として外国語の存在を挙げ、日本語では「犬」というが、英語では「dog」というように別の音声があてられてというよう

な説明があるが、これは恣意性の証拠というわけではない。各国語によって指し示す範囲が異なるし、使い方も異なる。したがって、「犬」と「dog」は指し示す内容に共通部分があっても、別の単語と考えることができる。

恣意性とは、指し示す内容の切り分け方の恣意性と深く結びつくもので、その切り分けられた概念としての内容と割り当てられた音とが恣意的であるという**二重の恣意性**である。しかし、色の名前と周波数の区分が言語によって違うということは、外国語の存在が恣意性を表しているとは言えるだろう。

この恣意性を理解しておかないと、認識が単語の音声がもつイメージに縛られてしまうことになる。まず、自分の使う国語の概念の切り分けに縛られていることの認識と音声の与えるイメージに左右されないことが重要である。つまり、それぞれの世界の認識はその土台となる言語(記号)によって組み立てているという自覚が必要で、何かどこかにある絶対的な人間から離れた真実を表現しているわけではない。

エーコの記号論

『記号論』(ウンベルト・エーコ著、池上嘉彦著)を2年間かけて読んだ。意味の通じない訳が多く、原著(エーコが英語で書いたもの)を参照して初めて理解できる箇所が多数存在した。章によって同じ英単語に別の日本語訳をあてている個所もあり訳語統一がされていなかったので理解に時間を要した。パースからエーコに受け継がれた概念だが、ソシユールにない言葉の受け手の**解釈**という観点が非常に参考になった。人間の思考が言葉の連鎖によって行われているという指摘が重要だと思われる。

認知科学

『認知科学の方法』(佐伯胖著)の学習から始め、日本認知科学会の学会にも参加し、研究をすすめた。アフォーダンスの考えに触れ、思考と身体の関係についても思考をすすめた。『アフォーダンス』(青土社)の著者の一人、佐々木正人氏を迎えて研究会をおこなった。舞踏、オペラ、能楽など身体表現についても学んだ。

思考と言語

記号論と認知科学を結びつけるものとして、『思考と言語』(ヴィゴツキー著)、『ことばと認識』(チョムスキー著)の読書会を通して、言葉がいかに関係を枠づけ決定しているかを追求した。

新たな方向へ

以上の研究を踏まえ、時代によって異なる思考の枠組み(エピステーメー)を指摘したフーコーの『言葉と物』に取り組むことになり、2023年からの研究はスタートした。

『言葉と物』におけるエピステーメー

フーコーの著作『言葉と物』における「エピステーメー」とは、ある時代や社会における思考の枠組みであり、その時代の様々な学問の土台となっている知のルールである。それは、ある時代・社会の人々が共有する物の見方、考え方であり、無意識的に共有されているという。『言葉と物』では、3つの時代、ルネサンス時代・古典主義時代・近代におけるエピステーメーの変遷とその内容が分析されている。

ルネサンス時代のエピステーメー

フーコーによれば、ルネサンス時代(16世紀)のエピステーメーは「類似」であるという。この時代の知とは、神の作った徴(しるし)を読み解き、隠された類似を発見することであった。例えば、「クルミは脳の形に似ているので、クルミは脳の健康に役に立つ」などの例があげられている。当時は、世界について理解するには、物に刻まれた徴(しるし)を「類似」によって読み解く必要があった。

古典主義時代のエピステーメー

古典主義時代(17世紀半ば~18世紀末)の思考は、「秩序」と、「表象」によって特徴づけられると考えてよいだろう。一つ目の「秩序」であるが、この時代には「類似」はしりぞけられ、比較、つまり同一性と相違性により世界を「秩序」づけ、体系化しようとした。デカルトは、類似に頼ることは、誤謬の機会を与えると指摘する。それに代わり、「人間理性のはたらきはほとんどすべて、この比較という操作を可能とするところにある」(『精神指導の規則』)として、比較、すなわち同一性と相違性、計量と秩序で世界を分析すべきとした。世界を分析・認識する方法が、類似ではなく分析による秩序づけへと変わったのだ。その秩序づけの枠組みとしてフーコーは<マテシス>と<タクシノミア>があるという。<マテシス>とは、代数学を普遍的方法として、単純な自然を秩序づける学であり、<タクシノミア>とは、同一性と相等性を扱う分節化と分類により、複雑な自然を秩序づける学である。この2つの学により、順序を定め、事物を表(タブロー)の中に整理することが、世界を理解することだと考えられていた。

もう一つ、古典主義時代のエピステーメーを特徴づけるものは、「表象」である。『ポールロワイヤル論理学』では、「記号は一方においては表象するものの観念、他方においては表象されるものの観念という二つの観念を含んでいる。記号の本性は、前者によって後者を喚起する点にある。」と表現されている。これは、シニフィアン(能記、記号表現)とシニフィエ(所記、記号内容)にあたるもので、記号の二元的理論である。ルネサンスにおいては、シニフィアンとシニフィエの間には、類似による標識が隠されていたが、古典時代においては、純然たる二元的理論となった。言葉は事物の「記号」として機能し、事物を「表象するもの」としてはっきり位置づけられた。表象とは事物を記号に置き換えることにより、頭の中のできる概念・イメージと考えられる。記号と表象は別れがたく結びつき、記号が記号であるための条件は、その表象作用にある。フーコーは、「記号は認識の内部で働き、記号は分析と不可分であり、分析なしに記号は成立しない」、「古典主義時代の記号は、表象作用—つまり思考のすべて—と同一の広がりを持ち、それを全体として踏破するものになった」と表現して

いる。

フーコーの『言葉と物』では、古典主義のエピステーメが一般文法、博物学、富の理論においてどのように展開されていたかを詳細に分析し、さらに第2部においては、人間を中心とする近代のエピステーメに進んでいく。

教育という観点から

では、教育という観点から、古典時代のエピステーメがどのようなヒントになるかを考察してみよう。

一つ目は、現在でも古典時代のエピステーメがあてはまる面があり、教育においても、「表象」と「記号」は重要な役割をはたしている、ということである。自分の中にある概念やイメージを生徒に伝えたいと考える教師も多いことだろう。一種の表(タブロー)のようなもの、記号の指し示す表象の世界を生徒が獲得しさえすれば、概念を伝達できるのではないかということである。デカルトからつながる「比較」と「分析」の考え方は、現代の教育にも反映されている。教育現場では、どのような表象が効果的か、どのような表象ありえるか、新しい言語や記号はないかを考え、創意工夫する余地があるだろう。

二つ目は、現代の教育が、古典主義時代のエピステーメと同じように、知識と世界を表(タブロー)として理解しそれを伝達する面があるとすれば、その表(タブロー)の深層、あるいは表の外に、表には表現できていない何かあるのではないか、それは、「言葉と物」第2部の「人間中心」なのかも知れないし、別の物かもしれない。現代においては、様々なことがデータベース化され、また日常生活でも表計算ソフトなどが活用されている。例えば、生徒の成績などのデータは有用なものではあるが、生きた人間のごく一部のことしか分からない。もしかしたら、表(タブロー)では表わせない、別の中心的原理が働いているかもしれない。

三つ目は、エピステーメという概念が示唆するものである。現代の教育において「何を教育すべきか」、さらには「教育」という概念そのものも現代のエピステーメにより支配されているとすれば、そのエピステーメはどのようなものか、そのあたりを一段高い視点から見ること(メタ認知)はできないだろうか。我々も無意識のうちに、現代のエピステーメに支配され、その中で生きている。そのことを意識し、相対化することが重要だと考える。